

家族の時代

清水義範



家族^{かぞく}の時代^{じだい}

著 者 — 清水義範^{しみずよしのり}

編集人 — 岡野敏之

発行人 — 伏見 勝

発行所 — 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一 千一〇〇一五五
大阪市北区野崎町五の九 千五三〇
北九州市小倉北区明和町一の一一 千八〇二
名古屋市中央区栄一の七の六 千四六〇

印刷所 — 図書印刷株式会社

製本所 — 大口製本印刷株式会社

第一刷 — 一九九五年(平成七年)

六月十六日

ISBN4-643-95046-3 C0093

© 1995, Yoshinori Shimizu

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

¥1400-



三回忌

7

熟年離婚

26

四十九年

46

離婚届

65

財産分与

85

再婚希望

104

プロポーズ

125

とまどい

145

波紋

165

きしみ

184

もくろみ

203

説得

222

それぞれ

242

結婚式

262

装画・題字

峰岸 達

装丁

重原 隆

家族の時代

三回忌

「ちよつとボケかかつてるんじゃないの」

冷たい口調で断定的にそう言ったのが、粟田玲子である。自分の夫の父親、つまり舅に対してその断定はきついんじゃないかと思えるところだが、夫の健一郎はあっさりと同意した。

「もう、かなりボケてるぞ」

厄介な存在だと、あからさまに批難するような口調だった。

「二年ぐらい前から少しずつおかしくなってるだろう。何べんでも同じ話をしてるしなあ」

「もの忘れもひどくなってるみたいよ。うちの睦美が今年から高校生だつてことがどうしても覚えられないみたいだもの」

「お前を見て、どなたでしたっけ、とか言ったりするのか」

「まさか。いくら何でもまだそこまではいつてないわよ」

そうなのである。まだそういうふうにしてすべてを忘れてしまっているわけではない。だから、ボケていると決めつけるのはいささか乱暴なのだ。少し忘れっぽくなった、という程度のことにはすぎない。

なのに身内というのは、平気でボケてきたなどと、老人が耳にすると心臓のあたりがヒヤリとす

る言葉を使うのである。

自分の親のことだと、平気でボケたとか、毫碌もうろくしたとか、ありやもうダメだね、なんて言うのだ。他人に対する時と違って、気安く残酷なのだ。

「それにしても、仕事のことで言ってくる意見がやたら古めかしくて、慎重でなあ」

四十八歳の息子は、七十七歳の父、草平そうへいについてそう言った。父が一代で興した会社を受け継いで、今現在はその社長である。ただし草平は一応会長ということになっていて、会社の運営方針などに口を出してくる。それがわずらわしいというのだ。

「昔とは時代が変わってるのにお祖父ちゃんにはそれがわかんないのよ」

カマンベール・チーズを楊枝ようじで口へ運んで食べながら玲子はそう言った。この夫婦は寝酒のブランドーを楽しんでいるのである。二人の娘は、それぞれ自分の部屋に引きこもっていた。

「そうなんだよ。いろいろ手を抜けていくってことにはとにかく反対なんだ。今まで通りが一番いいんだってな。それじゃあ将来性がないってのがわからないんだ」

「それは、いいのよ。あなたが社長なんだからあなたの考えでやっていけば」

玲子は何の迷いもなくそう言った。

そうだな、と健一郎はうなずき、グラスのブランドーをちびりとなめた。それから、ふとこう言った。

「それにしても、問題は今度の三回忌だよ」

玲子が舅の草平のことをお祖父ちゃんと呼ぶのは、自分の子供たちの位置に立って呼称が決まるという、日本的な方式によるものである。そして、その言い方でいけば、曾祖母ひいばあちゃんということになる草平の母のことが、この一家では大祖母おおばあちゃんと呼ばれていたのだが、二年前に九十三歳で大往生していた。

今年の二月が、その人の三回忌なのである。

「どうしてあんなに張りきっちゃって、みんなに号令かけるんだろうなあ。なんとしてでも都合をつけてこの三回忌には顔を出すようにって、みんなに言いまわってるだろ」

「子供たちはともかく、必ず夫婦揃って出席してくれって言われたわ」

「うん。もともとそのつもりだったけど、高圧的な言い方が妙だよな。何をそんなに力んでるんだろ」

健一郎はほんの少し苦い顔をした。

「それに限らず、この頃、なんか頑固に命令口調でしゃべるようになってるだろ。おれの言うことがきんのか、という調子で」

「その辺が、やっぱり歳なのよ」

玲子は夫の顔を見ないで、突きはなすように言った。

健一郎の二度目の妻で、歳がちょっと離れていて四十一歳である。健一郎は最初の妻との間に子供を作らず別れているから、後妻だということと不自由なめにはあっていない。

比較的若くて、まだ色香も残している妻を健一郎は美しくて気位の高い鳥のように扱っていた。だいにしている、ということである。第三者に言わせれば、尻に敷かれているということである。

「もともと、そんなにワンマンな親父ではなかったんだがな」

「でも、儀式とかになると舞いあがっちゃうのよ。今は仕事のことだって、あなたにいろいろ言えないわけじゃない。引退した身なんだから。そういうところへ、法事なんかがあると、久しぶりに自分が主役で、興奮しちゃうのよ。だんだん忘れられかけてる人が、急にみんなの中心になるわけでしょう。それでついつい張り切りすぎちゃうの」

テレビはついているが、二人ともそっちには注意を向けていない。新宿区内にある、築十二年の

分譲マンションの七〇二号室。三LDKのうちのリビングルームで、二人は一週間先の法事について話しあっている。

「いきる楽しみか。うん、男だからなあ」

「お年寄りにあんまり調子にのられても困っちゃうんだけどね。やっぱり、どこか見当違いのことを言ったりすることが多くて」

「そうだよな」

「男の年寄りはその辺が面倒なのよね。どうしてもプライドみたいなものがかからんでくるんだから」

健一郎の父、草平が興した会社は、栗田商事、といって、贈答品のあれこれを扱う問屋である。草創期には、冬はカレンダーを、夏は扇子を主に扱って業績をのばしてきた。会社などがお得意先にそういうものを配った時代なのだ。

健一郎の代になって、今そこは株式会社栗田ギフトという社名だが、贈答品問屋である点は同じだ。もともと、カレンダーはともかく、近頃は扇子はギフト商品ではなくなっている。もっぱら扱っているのは、ドーナツを食べれば毎週毎週千名様にドコちゃん三段お弁当箱が当たる、なんていう、いわゆる販促サービス品の類である。従業員二十名ほどの小企業主なのだ。

「考えてみれば、大祖母ちゃんが亡くなったあたりから、親父も少しずつ変になってきたんだよな。葬式の時に、草加の叔父さんと大喧嘩しただろう。それも、線香を一度に何本立てるべきかなんていうつまらないことで。あの辺からどうもわからず屋になってきてるんだ」

「あれ、会社から手を引いてすぐのことだったでしょう。その前から、実質的にはあなたがきりもりしてたんだけど、社長はお祖父ちゃんになってたんじやない。それが、あの頃に会長ちやうどつてことになって、いよいよ引退したわけよ。だから、葬式なんかがあるとそのことに誇りがかわってくる

の。まだまだおれは中心人物なんだって、ムキになっちゃうんだと思うな」

「おかしかったもんなあ。骨壺こつぽを大理石にする必要なんかないんだ、という三十分ぐらいの演説を何回もきかされたぜ」

「それから、遺産のこと……」

玲子はちよつと声をひそめた。

「そうそう。大祖母ちゃんが遺したのは、自宅のこの土地の半分だけなんだから、割って分配できるものではないって、有無を言わせぬ口調で叔母さんたちにハンコつかせちゃったもんな」

「叔母さんたちは、しっかりという形見をもらっていったからそれでいいのよ」

「そうだけど、あの時の親父の張り切り方はちよつとすごかったよ」

栗田草平の自宅というのは、薄汚れた住宅街とは言うものの新宿区内の山手線の内側にあって、今ならそのあたりの土地はちよつと普通の人には手が出ないということになってしまっている。草平はその土地の半分の戦後すぐ亡くなった父から相続していたのだ。

「今度の三回忌には、また何かその辺のことでゴタゴタするんじゃないかって気がするんだよな。みんなを集めて、とんでもないことを言い出すんじゃないだろうか」

健一郎は疲れた声でそう言った。

夫が三杯目の焼酎しょうちゅうのお湯割りを作るのを見て、加寿子かすこは条件反射のように言った。

「飲みすぎると、明日つらいわよ」

「そんなに飲みやしないよ」

大場義光おおば よしみつは苦い顔をして答えた。それからしばらくスポーツ・ニュースを視ていたが、応援しているプロ野球チームのニュースが終ったところで、小冊子を読んでいる妻に声をかけた。

「毎日ちよつとずつの酒はかえつて健康にいいんだぞ」

読んでいた小冊子は、新聞代を払うと集金人がくれる暮らしのメモのようなものだったのだが、それを膝ひざに置いて加寿子は言った。

「そんなこと言つても、またγGTPガンマが高くなるんだから」

「γGTPのことなんか気にしないでいいんだよ。あれはちよつとのことですが、めちやくちやな数字にまで上がるんだから。働き盛りの男がγGTPのことなんかかまっていられるか」

「でも、お父さんもそろそろ体のこととか注意しなきゃいけない歳よ。いっぺん人間ドックとかに入つたほうがいいんだから」

こで言うお父さんは、夫のことである。二人には、上が大学生の女の子、下が今年高校に入る男の子という、子供があるのだ。

その父親である大場義光は五十二歳である。妻加寿子は四十六歳。

「そんなヒマがないよ」

「ヒマは自分で作らなきゃ。せっかくの休みだとゴルフに行っちゃうんだから」

「そんなにゴルフばかりしてるわけじゃないだろう。仕事が忙しくてヒマがないんだからな」

大場義光は人を十五人ほど使う小さな建築工務店を経営していた。一般住宅の基礎工事だけを専門に請け負うような会社である。板橋区内に半分倉庫のようになってゐる会社があり、その二階が自宅だった。

「仕事が忙しいんだから、よけい体のチェックはしておかなきゃいけないのよ」

「それはわかつてるけどな」

加寿子は夫に対して姉のような口のきき方をするのだった。

「今度の日曜日にも、いっぺん山田クリニックへ行つたらどう」

「ダメだろう。今度の日曜日は法事があるんじゃないか」

「あ、そうか。忘れてたわ」

大場加寿子は、栗田草平の長女であり、栗田健一郎の妹であつた。大祖母ちゃんの三回忌の法要には、夫婦揃つて顔を出すように父から言われているのだ。

「もう三回忌だよ。早いもんだ」

と大場義光は言つた。

「そうか、二月だもんね。あのお葬式の日、寒かつたもんねえ」

「葬式つて、たいてい寒い日じゃないか。襖をとつぱらつちやうから、ストーブがききやしなくて、いつも震えてるような気がする」

「そんなことないわよ。ポカポカとあつたかい日のお葬式だつてあるでしょう」

「おれの体験ではいつも寒いんだよ。年寄りには寒さが厳しいと死ぬのかな」

「うん。それはあるかもね。それが、暑さが厳しすぎる時」

どうでもいい無責任な会話だつた。だがそこで、夫が話を引き戻す。

「大祖母ちゃんつて、亡くなつた時に確か九十三歳だつたな」

「そうよ。九十三まで生きれば大往生だつてみんなで言つたんだもん」

「うん。まあそうだな。だけど、五年ぐらい家で寝込んでただろ」

「もうちよつとかな。まるつきり寝たきりつてわけじゃなかったけど、蒲団は敷きっぱなしで」

「家で寝てられたのは幸せだよな。普通だとあれ、老人専門の病院とかへ入れちやうだろう」

「お祖父ちゃんのとこ、看護の人を雇えるぐらいの余裕はあつたからできたのよ」

「いや、余裕はあつても、そこまでしない人のほうが多いぞ。あれはお義父さんも立派だつたと思ふな」

夫は焼酎をやり、飲めない妻はお茶でつきあつての会話である。

「大祖母ちゃんのだんなさん、つまりお前のお祖父ちゃんという人は、いつ頃亡くなったんだっけ」

「それはずっと大昔よ。戦後すぐなもの」

「お前は会つてないのか」

「ないわよ。生まれる前だもの。お父さんが結婚するちよつと前に死んだそうだから」

ここで言うお父さんは、父のこと。

「じゃあ大祖母ちゃんは五十年近く後家でやつてきたんだなあ」

「私が生ひの頃には、近所の若い人を集めてお茶の先生をしたの。どっちかと言うと、超然として、身勝手な人だったわ」

「あんまり可愛がつてくれなかったのかい」

「可愛がつてはくれたけど、自分から孫にかまうような人ではなかったわね。大祖母ちゃんってちよつとした家のお嬢様で、ごく自然に自己中心だったのよ」

栗田たけ、というのがその亡くなった人の名である。

「じゃあ、生涯思う通りに生きられたんだ。それはいいよな。お義父さんも最期までよく世話した。ところがそれにくらべると、健一郎さんだよな、問題なのは」

加寿子は思いがけないところに兄の名を出されて好奇心で瞳を輝かせた。

「お兄ちゃんのどこが問題なの」

「お義父さんとくらべて、あんなふうになんと親の面倒を見るだろうか、だよ。まだお義父さんも元気だけど、この先だんだんと年を取っていくんだからな」

「そうよね」

「お義母さんかあがいるとは言うものの、その人だつて年取っていく」